

## 「サクラマス(上)」 ビックジャンプの勇姿

### 精悍な川の王者

夏のある夕暮れ時。私は友人と一緒に庄川でアユのドブ釣りをしていた。アユは全く釣れる気配を見せていなかった。と、突然、白く巨大な魚体が水面下から跳び上がった。

「マスだ！」

回りにいた誰かが叫んだ。(本当にマスだ。かつてはどこでもよくみられた光景ではあったが、ありがたいものを見せてもらった)と私は感謝した。

マスとは、言うに及ばず「鱒(ます)のすし」の原料となっている、サクラマスのことである。平均体長60cm、体重3kg。精悍(せいかん)な顔に愛くるしい目。まさにサクラマスは川の王者にふさわしかった。

サクラマスの幼魚はヤマメと称される。県民の中には戸惑う方もおられるが、サクラマスとヤマメは同一の魚である。神通川や庄川では、夏のアユ網漁の際に混獲されたヤマメをよく見かけることができる。

河川で1年半の生活を経たヤマメは、春先、一部の魚の体表が親と同じような銀色して富山湾に下る。海に下った幼魚は、オホーツク海まで1年にわたる大回遊を経て、春には母なる神通川に帰ってくる。

盛夏。うだるような暑さの昼間、サクラマスは比較的水温の低い大きなふちの底でじっと耐えている。夕刻に近づくころ、理由はよく分からないが(私は「うれしくて」と思っている)、先のビックジャンプをして、その存在感を他に示してくれる。サクラマスは何も食べることなく秋まで大きなふちで過ごし、産卵の後、3年の劇的な生涯を閉じる。

明治時代には160トンもあった神通川のサクラマスの漁獲量は、今では約1トン。河川環境の変化から予測されていたとは言え、神通川においても漁業としてのサクラマス漁はもはや崩壊寸前の危機にある。

滅びゆくものへの愛おしさにはひとときわのものがある。果たして、サクラマスはそのビックジャンプの勇姿を、今年も私たちにを見せてくれるのであろうか。(田子泰彦)



富山市の神通川で投網により採捕されたサクラマス = 平成12年5月